

2人の続き①

takashiishimoto

*

素の舞台に出てきた2人の男は野球のユニフォームを着て、左手にはグラブとキャッチャーミットをはめており、共にほんの少しお腹が出ている。2人の男を以下ピッチャーのPとキャッチャーのCと呼ぶ。Pは実際にはボールを持っていないが、パントマイムの要領で、右手のスナップを使って左手のグラブにボールを放り込む仕草を繰り返して、Cに顔を近づけ、ニヤニヤしながら小声で何やら話しかけると、Cはそれを聞いて大声で笑い出す。この時まで客電は付いたままだが、Cと、Cにつられたように笑い出したPの笑いが続いている間に、徐々に客電が落ちてくる。と、2人とも急にびっくりした声を出しながら、絡まりあうように同じ方向によけ、次の瞬間にはそろって客席の下手奥の方を見る。一拍置いてからPはその方角に向かって、「カンちゃん頼むよー。」と大声で叫ぶ。バッティング練習の球が大きくそれで飛んできたらしい。2人がしばらくその方向を見ていると、今度は素晴らしい当たりをレフト方面に飛ばしたのか、PとCの首がそろって大きな飛球線を追ってゆっくり動いた。

*

大学に入学すると、僕は山ほどある演劇サークルの中から、知名度や、新入生や先輩たちの人柄、既存の作品をやるのか、オリジナルなのか、シリアスな題材が多いのか、それともエンタテイメントにこだわっているのか、今はどんな人が台本を書いている、自分が書かせる可能性はあるのか、などを考えて探していたものの、最後はよく分からなくなって、なんとなく居心地がよさそうな、どこかボーっとしている人が多いサークルを選んだ。自分が行ったことがある舞台と言えば、銀座のソニービルのライブホールでやったお笑いライブに高校の時に1回行っただけだが、浪人時代から何かモノを書きたいと漠然と考えていて、まずはコントの台本でも書いてみたらおもしろいかもしれないと思って演劇サークルに入ることにしたのだ。部員の実働メンバーは20名くらいで、そのうちの半数が役者をやり、残りの半数は音効、舞台美術、照明などを請け負う舞台制作会社との連絡や調整、またその実際の仕事をサポートをする。役者の足りない部分は、舞台のたびに他の劇団や知人などから集めてくる。

僕が入った時は、内山さんという3年の女の子の人が脚本を書き、演出もやっていた。他の演劇サークルにはよくいるらしい、いまだに出入りしている偉そうなOBはほとんどいなくて、内山さんの劇団と言えたかもしれないけれど、それは内山さんが、自分の作った作品を上演したいと思っているほとんど唯一の人だからだった。そのほかの人々は、男は普段は麻雀をしたり、テニス旅行の計画を練ったりしており、女はたまにラウンジの溜まり場を覗いて、内山さんの次の指示を待っていた。内山さんは色落ちしたブラックジーンズに野暮ったいジャケットを腕をまくって合わせたりしていて、よく男の先輩達と一緒に麻雀をしていた。サークルの溜まり場でも、カード麻雀をやっている、少し下がった目尻がロングヘアに付けた前髪から覗いていて、割合よく笑った。

僕が読んだ内山さんの作品はどれもハッピーエンドだったが、僕には、その他にもそれぞれ共通する部分があるように思えた。作品の舞台設定については、元禄の頃の横須賀の漁村、70年代半ばの難波のデパートの婦人服売場（当時、大阪出身の女の子の先輩が1人いて、内山さんはその人の大阪弁を使いたかったらしい。）、現在の多摩川園にあるテニスクラブの事務室などまちまちだが、僕が感じた共通点を乱暴にまとめると、まず、登場人物達は自分達に直接関わらない世の中の出来事に関して、ほとんど注意を払っていない。横須賀の漁師達は都市文化とは無縁だし、70年代の難波のデパートで働く女の子たちは、当時の雰囲気は本当はどうであったかは別と

して、テレビの話や、人の悪口や噂話を喋りながら元気に、そして無為に過ごしている。彼らの日常は、舞台となる場所と家との往復が生活のほとんどの部分を占めていることが描かれ、閉塞感と、そこに成り立っている均衡と均衡をもたらすための仕組みが示される。次に、そこへ外部から物語を展開させる人物が登場する。例えば、横須賀の漁村に、ぼろの古着や、葉草や、子供が遊ぶための笛などを売り歩いている行商人が、商売以外に、家の立て付けを手際よく直してあげたり、老人に整体を施したりして、だんだんと村人に馴染んでいき、村はずれに仮の宿りを作ってちょくちょくやって来るようになっていたり、東京から難波へ単身赴任でやってきた管理職にある男は、自分の持ち場となった婦人服売場で働く大阪の女の子達の勢いに最初は押されながらも、自分が身に付けている、色合いや作りが控えめなダークグレーのスーツに対比させるように、客には仕立屋にも負けない位の知識をもって、趣味の良い鮮やかな色使いでの確なコーディネートを見せることにより、徐々に売場に受け入れられるようになっていく。そのようにして、外部からやって来た人達もだんだんと「そこにいる人」になるのだが彼らには、それぞれのいわくがあるのだ。行商人のおじさんは、実は、ライバル業者に先駆けて、大規模な樽廻船の中継地を建設しようとしている大阪の廻船問屋から派遣された人物で、条件に適合する漁村を自分達に都合よく再開発すべく、村人には気付かれないよう内々に立地調査をしていたのであり、また、デパートに単身赴任でやってきた男は、台東区にあった、小さい洋裁工場も裏手に持っていた洋品店の次男として生まれ、両親、兄とともに店も空襲で失った過去を持っていたが、エネルギーにあふれる大阪の女の子達に触発され（彼女たちも単身赴任の男の登場以降変わったのだが）、あと何年かで1980年代を迎えようとしている東京で、自分の手で洋品店を再建することを決意することになるのであった。こんな感じの話の幹にその他のエピソード、謎解きや推理が絡んで、会話のおもしろさで見せていく。ちなみに、多摩川園のテニスクラブの話は、こんな感じだ。最初、事務室兼控え室を舞台に、おばさん連中を教えている若手のテニスコーチ達が登場し、自分の生徒のことをネタに、悪口を言ったり、愚痴をこぼしたりしている。テニスコートはローテーションで使っているらしく、あるコーチが事務室へ戻ってくると、今まで休んでいたコーチのうちの誰かがまた教えに行き、新しい組合せでの会話がはじまる。その他に、素質のある学生を選びすぐって英才教育を施している老コーチとその助手、事務と受付のアルバイトをしている女子大生2人組、土地の有効活用のためにテニスコートとクラブを作ったオーナーとその息子、テニスを習っている妻の悪口をさんざ言われているところに迎えに来た有名演歌歌手などの登場人物が入り乱れ、閑静な住宅街の高級テニスクラブでは結構すごい人間模様が生まれていて、それがまた明日も続くことを暗示して終幕を迎える。ドロドロした人間関係をコメディで仕立て上げていて、僕が入学する前の年の秋にやったその舞台の台本は、僕はおもしろく感じたし、笑えて、どこかもの悲しいけど、勇気が出る、そんな話だった。僕が入ったサークルではそんな舞台を年に2回、いつも決まった神田の小ホールで公演した。観客は部員の友人や家族、その家族の友人、ほんのたまに顔を見せるサークルのOBなどほとんどが関係者だったけど、そんななかにも内山さんの創る舞台のファンと呼べそうな人は何人かはいらると思う。